



月刊

インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

財団法人 日印協会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 105 年)



杉並区日印交流協会・日印交流杉並議員連盟発足式

目次

1. 「日印交流協会」・「日印交流杉並議員連盟」が発足	p. 3
2. 我妻和男氏、瑞宝中綬賞の榮譽に	p. 4
3. 鹿子木理事の西北インド紀行 (1)	p. 5
4. インド季報	p. 10
5. インドニュース	p. 12
6. 今のインド	p. 15
7. イベント情報	p. 16
8. 新刊書紹介	p. 17
9. 掲示板	p. 18

1. 「日印交流協会」・「日印交流杉並議員連盟」が発足

日印交流に熱心に取り組まれている杉並区で昨年発足した「杉並区日印交流協会」（根本郁芳会長）に続き、「日印交流杉並議員連盟」（河野庄次郎会長）が設立された。5月22日荻窪駅前のインドレストランのナタラジで両団体と杉並区交流協会の主催で発足式が行われた。式には山田杉並区長、来賓として小野寺外務副大臣、バチャタリヤ駐日インド公使、平林日印協会理事長、野田元駐印大使、ペマ・ギャルポ横浜桐蔭大学教授等、約50名が出席し盛大に発足式が行われた。山田杉並区長はご挨拶のなかで、近年、日本とインドの交流も政治、経済分野を中心に交流が活発化してきていることは非常に悦ばしい。高円寺の蓮光寺にインド独立の志士、インド国民軍の故チャンドラ・ボース氏の御骨を保管されているご縁もあり、昨年11月に開催した「杉並区日印交流年記念フェア」をきっかけに区民の間でもインドへの関心が一段と高まってきている。このような状況のなかで、恐らく地方自治体では初めて、インドを対象にした交流協会と議員連盟が発足したことは大変嬉しく思っている。杉並区としては市民レベルで、特に文化と精神面での交流が深まることを期待している旨のお話をされた。昨年の「杉並区日印交流記念フェア」では日印協会としては講演会と日印交流写真展の企画で協力をしましたが、今後とも杉並区の日印交流事業を支援する考えである。また皆様の身近での日印交流事業へのお手伝いもできるだけしたいと考えているので、どうぞ遠慮なく協会事務局にご相談ください。



平林理事長の発足記念のご挨拶

2. 我妻和男氏、瑞宝中綬賞の榮譽に



我妻和男氏(筑波大学名誉教授)は春の叙勲で、日本とインド及び日本とバングラディシュとの永年にわたる交流に果たされた功績に対して外務省推薦の民間人としては最高の榮譽となる勲章、『瑞宝中綬賞』(勲三等瑞宝章)を5月9日、外務省での伝達式で外務副大臣より授与された。伝達式の後、^{けいこ}綱子夫人と共に外務省での午餐会に出席し、他の外務省推薦の受賞者と共に宮中へ参内された。

続いて皇居内豊明殿にて、天皇陛下ご臨席の下、各省庁推薦の受賞者約250名が参列して祝典が行われ、我妻氏は受賞された全参列者を代表し、陛下に対し授賞への御礼を申し上げ、これに対し陛下より労いと励ましのお言葉

を賜わった。

日印協会としても長きにわたり日印協会にご協力を頂いている氏が叙勲を受けられたことを衷心よりお祝い申し上げるとともに今後のご活躍とご健勝を祈念したい。

我妻氏は1967年10月から1971年3月まで、インド・西ベンガル州シャンティニケトンにあるロビンドロナト・タゴール創設のタゴール国際大学(現在はインド国立 Viswa-Bharati となる)で客員教授として、日本語及び日本文化を教えてこられた。帰国後の1971年3月10日に日印タゴール協会を設立、自ら事務局長に就任し、早稲田大学、筑波大学、麗澤大学などでインドの言語・文化を講じるかたわら、日印文化交流に尽力され、これまでに文化・学術交流のためインドに62回、バングディシュに15回訪問されておられる。



氏は日印タゴール協会事務局長として、これまでロビンドロナト・タゴールの偉大な業績を日本で紹介する様々な活動を行った他、インドにおいて日本語、日本文化の紹介を行う拠点作りのための財政支援を精力的に行ってきた。主な業績をあげると次の3拠点の創設が我妻氏の多大な尽力により実現した。

①タゴール国際大学日本学院の創設

1988年の日本に於ける「インド祭」の際、Nimai Sadhan Basu (ニマイ・ショドン・ボシュ)氏からの要請で1991年9月11日に財政支援し、1994年2月に落成した。

②タゴール国際大学日本語学科の創設

Dilip Kumar Sinha 副学長の要請により、財政支援し1999年3月に落成した。これにより従来の Certificate Course と Diploma Course に加え B.A. Course を新設する事が出来る様になった。

③印日文化センターの創設

2003年7月22日付け文書により、西ベンガル州情報文化省ベンガル・アカデミ事務局長 Sanat Kumar Chattopadhyay (シヨノト・クヒマル・チョットパディアイ)氏の名で、印日文化交流の為の印日文化センター建設への財的支援要請に応じて援助活動を開始した。2007年2月までに、計1,185万円がベンガル・アカデミへ寄付された。2007年8月23日、インドを訪れた安倍総理大臣ご夫妻をお迎えして落慶式が行われた。完成をした建物は5階建、各階の床面積は400坪〔総床面積は2,000坪〕である。

☆我妻氏は2007年の日印交流年外務省実行委員会文化担当実行委員として活躍された。

日印交流年には自らも訪印し、コルカタとデリーの2都市で講演をされた。

- ① 7月20日、コルカタ大学で『岡倉天心とタゴールの素晴らしい出会い』の演題で、ベンガル語で1時間半講演(在コルカタ日本国総領事館・コルカタ大学共催)
- ② 8月17日、ニュー・デリーの IIC (India International Centre)で上記の演題で、英語で1時間半講演(日本大使館と IIC との共催)

☆我妻和男氏の略歴

1931年8月14日、東京・江戸川区小松川、逆井生まれ

1959年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（インド哲学専攻）修了

1963年2月 同大学 学芸学部、講師（ドイツ語）、1965年3月、助教授に昇進

在籍中の1967年10月～1971年3月 文部科学省海外派遣、インド国立タゴール国際大学 日本学科長。客員教授

1972年3月 早稲田大学商学部助教授

1974年4月 筑波大学現代語・現代文化学系助教授

1978年6月 同 教授。1981年6月～1984年4月 同 学系長

1991年4月 麗澤大学言語教育研究科 教授。2001年4月～2004年3月、同科の学科長

2008年 現在、筑波大学名誉教授

（我妻和男氏のプロフィール）

我妻和男氏のこうした長年にわたるインドとの文化交流及そして国際貢献はひとえに夫人の献身的な支えと家族の理解があってこそ、達成されたものと思われます。ここで、ご家族のことについても簡単にご紹介します。



我妻和男氏は1960年1月5日学生時代に知り合った綱子けいこさんとご結婚され、その後、4人のお子様（2人の娘さんと2人の息子さん）に恵まれ、再来年には金婚式を迎えられます。

現在、千葉県市川市に奥様とお2人でお住まいですが、近くご長男のご家族と同じ屋敷に住まわれる予定と伺いました。

<文責：鹿子木謙吉、我妻氏提供の資料及び
2008年5月16日のインタビューによる>

3. 鹿子木理事の西北インド紀行（1）

初めてのインド旅行で、インドにはまった！

初めてインドを訪れたのは、1972年8月の協会主催「インド大陸横断研修の旅～インド列車旅行大作戦」で、

カルカッタ〔現在コルカタ〕からアグラまで特別列車を仕立て、夜中列車で移動し、昼間は列車を大きな駅の側線に止めて、ガヤ、ラジギール、ナーランダ、ベナレス、サルナート、カジュラホなど、北インドの主な観光地をバスで見学し、アグラからは貸切バスで、所謂インド観光の目玉、ゴールデン・トライアングル(黄金の三角地域)といわれるアグラ、ジャイプル、デリーの観光スポットを見学して廻りました。デリーからは飛行機でカシミールへ飛び、カシミール・ダル湖のハウスボートで3泊し、パハルガムなどの周辺観光地を見学した後デリーに戻りました。デリーからは更に空路でボンベイ(現在ムンバイ)に飛び、オーランガバードへ往復、そこを基点にアジャンタ・エローラの遺跡を見学しました。合計3週間の大旅行でした。

実は、その前年の1972年5月8日に協会に入った私に課せられた最大の任務は、この旅行を成功させることでした。私は旅行会社のスタッフの方々と、計画、準備、PRなど精力的に活動しました。計画段階ではこの旅行を意義あるものにする為、出来るだけ若い人達や子供たちに影響力を持っておられる小・中・高等学校や大学の先生方に参加してもらおうと、文部省の後援を得て、学校関係を重点的にPRしました。マスメディアにもご協力を頂き、新聞紙上でも宣伝した結果、予想以上の約180名の方々が応募して、参加して下さいました。

私も団長・高岡大輔氏（当時、協会副会長）の補佐役として、入所した翌年に初めてインドの土を踏み、インドの人々と直に触れる機会を得、観光のほかにもインドの小・中・高等学校を訪問したり、カシミールの大学で1日インド・セミナー(インドの大学の先生にカシミールの歴史や文化をお話頂いた)

に参加したりする事ができ、インドを知る貴重な体験をさせて頂く幸運に恵まれました。こうして私はインドの魅力にすっかりとりつかれてしまいました。

その後の協会が企画した旅行では、山辺知行先生・高田倭男先生を団長とする「インド染織・服飾研究の旅」が1974年から約20年間で24回続き、私も両先生のご指導を得て、企画立案や現地調査、更にお世話役として17回ほど旅行団に同行させて頂きました。インド染織の場合、手仕事は大都会から遠く離れた村々でなされている場合が多く、従って大都市だけでなく農村地帯やインドの僻地をも訪れる機会を得、両先生のお蔭で、ある程度の染織の知識も得るここも出来ました。

こうした体験が後の日印文化交流活動（日印の芸能交流やインドでの日本文化紹介の催事の展開など）をする際にも生かされ、2001年末に事務局を退職してからも、毎年1度位のペースでインドを訪れて、インドの友人と旧交を温めたり、これまで訪れた事の無い名所旧跡や伝統染織・刺繍が盛んな地に足を踏み入れたりしている次第です。

西北インドの旅：ルートと目的

少し前置きが長くなりましたが、今年の3月6日から19日まで13泊14日間で、デリーを基点にアムリトサルに2泊<パンジャブ州>、チャンバに3泊、ダラムサラ（マックロードカンジ）2泊<ヒマチャル・プラデシュ州>、チャンディガルに1泊<パンジャブ州とハリアナ州の州都>を訪れた時のお話をいたしましょう。〔旅程：地図参照〕

旅の主目的地はチャンバでした。と言うのも、私が前述の「インド染織・服飾研究の旅」で初めてアーメダバードのキャリコ染織博物館で目にしたチャンバ・ルマール刺繍の美しさに心を惹かれ、今もチャンバでこの仕事が継続されているかどうかを確かめてみたかったのです。

チャンバに行く途中、せっかくの機会なので、少し大回りをしてアムリトサルで、シク教の大本山黄金寺院に参拝して旅の安全を祈願し、併せてインド現代史上有名なジャラン・ワラー・バーグ(英領インド時代に大虐殺があった場所)、更に、印パ分離後、両国国境のワガで朝晩執り行われていると伝えられている、国境のゲートの開閉式典を一度見学したいと思っていたのです。

帰路、チャンバからチャンディガルへの1日の車の旅はきつ過ぎる行程なので、それならダライ・ラマ14世が滞在されておられ、チベット亡命政府本部があるダラムサラに立ち寄って見学してみようということになりました。

チャンディガルは俳句の研究者で、ご自身もヒンディー語で俳句を詠まれ、俳句仲間の句を纏められ、『バーラティエ（インドの）俳句』として最近出版されたアンジェリー・デオダール女史のお住まいがあるところ、昨年我が家にお泊りいただいたこともあり、事前に連絡してお会いする事になりました。

デリーでは道中エスコートして下さる O.P. ロイさんと旅行の打ち合わせをし、列車の切符、ホテルの手配などのほか、インド民芸館訪問や、2、3の友人宅を訪問して旧交を温めることが目的の滞在でした。

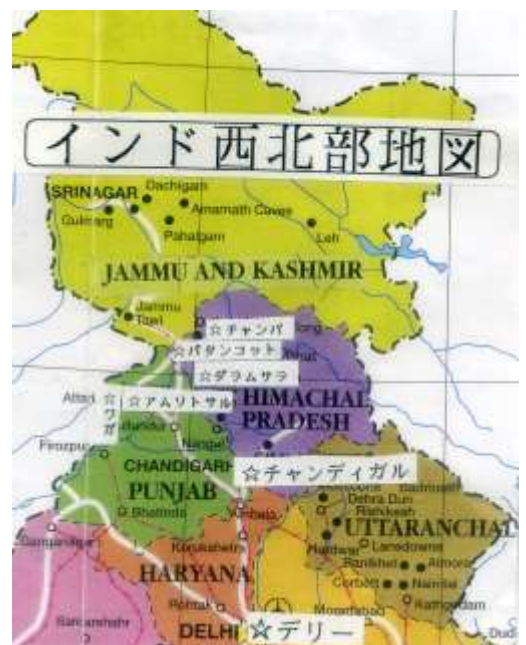
では、これから第45回目の訪印の旅日記を紐解いて見ましょう。

1. アムリトサルへ列車の旅

上記の「旅の目的」で述べたように、デリーでは旅の準備をし、デリーに戻った際にお会いする方々に電話で面会の約束をいただきました。3月8日夜、ニューデリーのニザムディン駅に19時40分到着予定の急行寝台列車が2時間半遅れて到着し、同行の O.P.ロイさんに車体に張られた乗客名簿にある自分の名前をチェックしてもらい、無事列車に乗り込み、自分の座席に座ってやれやれ、西北インドの旅へ発車オーライです。

ホームで遅れているお目当ての急行を待っている間に、2-3本遅れた列車が到着しては出発して行きました。自分独りでは駅の構内アナウンスが十分聞き取れない為、間違えて到着した列車のどれかに乗ってしまったかもしれません。

実は数年前にそのような間違えをして、時間通りに来た列車にあわてて飛び乗ったら、各駅停車の普



通列車でした。乗るべき急行は遅れて来て、途中で列車の窓から外を見ていた時にその急行に追い抜かれたことに気がつきましたが‘後の祭り’、地団太を踏んだことがありました。

今回はロイさんと一緒にしてもらって大助かりでした。インドでは、何時に誰かと、どこそこで会合するなどといったような、ある重要な目的の為に時間を制約された場合、列車の独り旅はリスクがとて大きいのです。気の向くままの独り旅では、インドの列車の旅は結構楽しいものですが、時間通りに動こうとする場合は、現地語が分かる人をガイドにお願いする事が肝要です。

インドの長距離列車は1,000キロ、2,000キロを走るものは珍しくありません、中には2~3日かけてやってくる列車もあるので、終点近くなると、2~3時間の遅れは少ないほうかもしれません。ちなみに、私たちが乗った急行寝台列車はチャッティスガル州のビラスプルからデリーを經由してアムリトサルまで、1,731kmを途中駅の停車時間も入れ、約41時間かけて走る列車でした。アムリトサルに8時40分につくべきところ、11時5分に到着し、2時間25分の遅れでした。東京では、サラリーマンが走っているように歩くといわれています。しかし、インドでは時はゆったりと流れていて、列車の動きもそれに合わせているようです。でも最近では、IT産業など経済発展による近代化、国際化の故なのでしょうか、大都会に於けるインド人の歩き方がだんだん日本人に近くなっているような気がします。

長距離列車の場合、大きな乗換駅〔ジャンクション〕では20分くらい停車してすることもあります。現地の人はこの事を良く知っていて、ホームで顔を洗ったり、田舎の人はコンロを持歩いていてチャパティを焼いたり、売店でその駅ならでの食物を買ったりして、結構列車の旅を楽しんでいます、よそ者はそうはいきません。

列車がホームを離れる時、日本のように「発車しますから、急いでご乗車下さい」などのアナウンスは一切ありません。“ポー”と汽笛を鳴らしたかと思うと、直に発車してしまいます。

でも、我々外国人が長距離急行列車から外に出なくても用が足りるようになっていきますので、ご安心下さい。食べ物、飲料水やチャイ、時には新聞・雑誌の類まで、車内販売のため物売りがひっきりなしにやってきますし、食事前になれば車掌が弁当の注文をとりに行きます。

2. アムリトサルにて

アムリトサルのホテルに着いて一服してから、外出して最初に行った所は、翌々日に乗るパタンコット行きのバス・ターミナルでした。時刻表の確認と何番の乗り場から発車するのか、到着地までどのくらいかかるかを知る事でした。約3時間の旅と言う事なので、少し余裕を持ってホテルを出て8時台のバスなら、お昼前に到着し、お昼はパタンコットで食べることにして、同地1時台発車のバスに乗れば、夕暮れ前にはチャンバ着くだろうとの計算をしました。ロイさんに相談すると、そんなに長いバスの旅は我慢がならないと、言い出しました。当初ロイさんに送って置いた英文の日程表には、鉄道以外は全てバスの旅と書いて置きました。予算的にもバスとハイヤーでは格段の差が出ます。何とか説得して、パタンコットまでは兎に角バスで行き、後はそのときの体の調子や乗り継ぎのバスの時間を見て決める事にしました。弥次・喜多道中では相棒とのチームワークが欠かせません。当地のバス・ターミナルは壮大なもので、行く先を示す路線番号も40近くあり、大勢の人が群がり、多くのバスがひっきりなしに、発車したり、到着したりしていました。バスは庶民の足という感じでした。



<写真はアムリトサル黄金寺院正面>

3. シク教大本山、黄金寺院

ホテルで遅い昼食を済ませてから、リキシャでシク教の大本山ゴールデン・templに、門前町に入って、遠く寺院の建物が見えてきました。正門から100mほど手前でリキシャから降りて歩かなければいけません。両側はみやげ物店が並び、道幅は20mくらいあるだろうか、かなり広いのですが、行き交う人の波で、押し合いへし合いして、通りの広さを感じさせません。ロイさんが白い布を売っている行商人捕まえて、それを2本買って、私にも1本分けてくれ、頭にこのようにして被れと自分で被って見せてくれました。そう言えば、この通りを歩く人でターバンを巻いていない人々は同じ様に白い布で頭を覆っています。大きな寺の門に入ると、左側に地下への階段があり、参拝者は皆その階段を下りて行くのでその後に従い降りてゆくと、そこは広く、大きな下足場でした。そこで靴を脱ぎ、裸足になり、いよいよ寺院に入ります。総大理石の2階建て、建物中央には、ドーム型の丸い屋根、その尖塔が空を突き刺す槍のように尖って、黄金色に輝いています。その塔の下はアーチ状の入り口になっていて、その両脇には2階に上り下りする細い階段があります。2階はシク教の歴史を伝える絵画や教団創始者グル・ナーナクの偉業を描いた画や肖像画、歴代のシク教指導者の肖像画や写真がびっしりと飾られてありました。

玄関の入り口から中に入ると、幅100mはあるかと思える大きなプールが目に留まります。プールの中央にドーム状の丸い屋根の寺院、中央に尖塔をもっていて、まさに黄金で光輝く寺院がありました。右手のプール・サイドとは幅5mくらいの橋で繋がっています。このプールの中の黄金寺院に毎朝グラント・サーヒブと称する大きなシク教の経典が僧侶により、寺院の社務所からシク教の儀式に則って恭しく運ばれ、安置されます。夕方には同様の儀式が行われて、この聖典が社務所に戻されます。プール・サイドは幅7~8mはあるでしょう、全て大理石のタイルで覆われています。そしてプール・サイドを囲むように正門から見える建物（シク教の歴史博物館）と同型の建物が口の字型に建っていて、実に壮麗な感じがします。

丁度、私たちがプール・サイドの中央の門から中に入り、左手から時計回りに1周して、黄金寺院の橋の袂へ廻ろうとした時、その場に居合わせたシク教の信者達が一斉に、バケツを持って、プールの水を汲み始め、プール・サイドの大理石のタイルにかけて洗い始めました。大勢の信者達が一斉に行うこの作業に我々観光客は度肝を抜かれました。もたもたしていた私のズボンの裾に水がかかり濡れてしまいました。こんなことにはお構いなく、あっという間に、この水掛作業は終わり、その後信者達は大きなブラシで磨く作業に入って行きました。

プール・サイドを一周してから、私達は博物館を見学し、下足番から靴を戻してもらい、寺院の正門を出ました。正門を出て、真っ直ぐ大通りを行くと、突き当たりになり、道は左方にL字に折れてますが、反対側には、インド現代史上汚点を残したジャラン・ワラー・バグ入口の看板があります。その看板の脇に2つの建物に挟まれた、奥行き10m、幅1mも有るか無いかの細い路地があり、その路地

を入ると広い公園に出ます。

路地の公園出口手前、右手の建物に沿った案内版に、ここが歴史的に有名な大虐殺事件が引き起こされた場所であると記されていました。インド史の本によると、英領インド時代の1919年4月13日に、この細い出口しか無い公園で約2万人のインド人が集会を開いていたところ、時の英総督サー・マイケル・オドワーの命により、ダイヤー大將指揮する軍隊による発砲で、インド人約400人が死亡、1,500人が負傷したと伝えられています。公園の一角には、記念碑があって、犠牲者の霊を弔う為の鎮魂のともし火が燃え続けていました。

4. 夕暮れ時、印パ国境の通行ゲート閉門、喚起の声沸きあがる式典に参列

第2次世界大戦が終了して2年後、1947年8月14日にまずパキスタンが独立し、翌日インドが独立しました。それまで同じ国民であった者たちが信仰する宗教により急に分離される事になってしまったのです。

インド北西のパンジャブ州アムリトサルから西へ約28kmにアタリ村があり、そこから1kmも行かないところに印パ国境のインド側の検問所と、これに続く国境のゲートがあります。インド側のゲートの手前には大きな門があり。門からゲートまで100mも無いほどの距離です。その門から、パキスタンに向って右手に衛兵の駐在所とVIPの休憩所に使われると見られる2つの建物が並んでいます。

道路を挟んで左手は、衛兵による朝・夕の国旗の掲揚と降下、ゲートの開閉、その前に行く数人の衛兵による大きな門からゲートまでの行進、敬礼などを見物するスタンドがあり、スタンドには5~60人は座れるように見受けられました。スタンドのゲート寄り、つまりパキスタン寄りにはVIPの席となっていて、私達はVIPの観光客にまぎれ、そこにもぐりこみ、写真をとる事が出来ました。



<写真は閉門式典を前にスタンドを埋め尽くした観衆、ワガ（インド側）にて>

日没が近づくと、衛兵が指揮官の号令により、整列・敬礼し、ラッパの音が響く中、決められたスタイルと歩幅で足を高く跳ね上げて、ゲートに向かい歩いて行きます。国旗が徐々に降ろされる中、インドとパキスタンの両観客席から割れんばかりの万歳（ジンダーバード）、万歳（ジンダーバード）の喚起の声が湧き上がりますが、私には、今一度、お互いが1つの国になりたいという願望の声にも感じられました。（次号に続く）

4. インド季報

「インド季報」2008年1月～3月号が完成したので要旨を紹介します。

◇最近の経済情勢

工業生産指標の発表：4月11日に中央統計局（CSO）から工業生産指数（IIP）が発表された。

2008年2月の対前年同月比を前年同月の対前々年同月比と比べると、製造業の成長が減速したことで、工業全体の成長率もやや減速していることがわかる。しかし、2007年度の平均成長率は9%を超えており、経済は依然として好調である。

物価、一次産品価格が上昇：商工業省から発表された1993年度を基準年（100）とした卸売物価指数によると、3月15日時点で223.6となっている。1月19日時点で対前年同日比で見た卸売物価上昇率は3.9%であったが、その後徐々に上昇し、3月15日時点では6.7%になった。とくに一次産品は国際価格が上昇した影響を受けて、対前年同日比で7.8%となっている。物価上昇の原因として、経済成長、外貨準備の増大、国際商品価格の上昇による影響が考えられる。物価上昇はこの間の高成長を牽引してきた企業部門の資金調達・投資に悪影響を及ぼし、経済成長の減速化を導く可能性を否定できない。

貿易の拡大：4月1日に商工業省は2007年度（2007年4月～2008年2月）の貿易収支を発表した。同期の輸出は対前年度同期比で22.9%の増加を示した。2002年度から5年連続で輸出は20%を越えた伸びを示しており、2006年度で6年連続となると予想される。同期の輸入は前年度同期比で30.2%の増加を示した。石油輸入額が26.8%増大したことに加え、経済が好調であったために、石油以外の輸入も31.8%増大している。この結果、同期の貿易赤字は対前年度同期比で46.9%拡大した。

失業率統計の発表：1月29日に全国標本調査局（National Sample Survey Organisation）から2005年7月から2006年6月までに実施された就業・失業についての標本調査の結果が発表された。失業率の変化を時系列でみると、男子よりも女子の失業率がより不安定であることが分かる。男女ともに都市部の失業率が農村部よりも高くなっている。また、農村部では不完全就業がより深刻である。この状況は2000年以降も改善されていない。

第6次中央給与委員会勧告：中央政府職員の給与改定・人事関係事項の検討を行ってきた「第6次中央給与委員会（Sixth Central Pay Commission）」（2006年10月任命、委員長 B.N. Srikrishna 判事）は、2008年3月24日に財務大臣に、基本給の平均40%引き上げなどを盛り込んだ報告（改定の勧告）を提出した。チダムバラム財務相は2月29日、2008年度（2008年4月－2009年3月）の予算案を国会に提出した。軌道に乗ったインド経済の恩恵を、農業、教育、保健などを通じて、より多くの国民にいきわたらせるという資源配分政策を今回も継続した。それと同時に、インフレを抑制しつつ、安定した経済成長を図る施策を盛り込んだ。

◇国内政治

選挙対策としての2008-09年度予算案：連邦下院議会の解散時期への憶測が飛び交うなか、会議派は2008-09年度予算案の作成に、これまでにないエネルギーを注入した。予算案では、総額6000億ルピーの滞納帳消し（loan waiver）政策が最大の政治的な目玉として盛り込まれた。

ラーフルの遊説活動：来る連邦下院選挙にむけて、若者、青年層を取り込もうという会議派の戦略の先頭にたつラーフル・ガンディーの動きは、引き続き注目されている。彼をサポートするべく設置されたタスク・フォース「未来への挑戦と機会検討グループ」も、若い世代の会議派への吸引戦略を具体化するための方策を4月中に作成する予定である。

党・政府を横断する人事：本年内に行なわれる多くの州議会選挙、さらには連邦下院選挙を前にした党組織の強化は、会議派の緊急の課題である。この間、西ベンガル、マディヤ・プラデシュ、ジャンムー・カシミール州の州会議派議長に現職閣僚が転出した。それに伴う小規模な閣僚人事（主に閣外相レベル）が行なわれた。ラーフルの閣外相任命は本人の辞退により実現しなかった。

両派共産党の党大会：3月下旬から4月にかけて、インド共産党（マルクス主義）（CPI(M)）とインド共産党（CPI）が、相次いで党大会を開催した。CPI(M)の第19回党大会では、帝国主義との戦いと国家主権の防衛、自由化政策と民営化政策に対する反撃、世俗主義的民主主義の防衛と連邦主義の強化、という3つの点が強調された。UPA政権自体の評価については批判的ではあるが、米印原子力協力協定問題も含め、決定的な対立にまでは至らないと予想される。

東北部3州の州議会選挙：2008年2月から3月にかけて、インド東北部の3州（トリプラ、メガラヤ、ナガランド）で州議会選挙が行われた。また、2008年から2009年前半にかけては、この3州のほかにも、合計10州で州議会選挙の実施が予定されている。今後実施されるこれらの州議会選挙は、早ければ2008年の秋にも実施されると見られる連邦下院選挙の前哨戦として、重要な意味合いを持つ。今回選挙が行われた東北部の3州は、いずれも、連邦政府与党のインド国民会議派が一定の勢力を保持している州であるが、いずれも政権獲得はならなかった。

その他州政治の動き：マハーラシュトラ州では、ラージ・タークレー(Raj Thackeray)の率いる

「マハーラシュトラ新建設軍団 (Maharashtra Navnirman Sena, MNS)」の活動家による北部インド出身移民の排斥運動が激化した。また、大統領統治下のカルナータカ州では、州(下院) 議会選挙の投票日が確定し (5月10、16、22日)、インド人民党、会議派、およびジャナタ・ダル (政教分離派) による選挙態勢作りが進んでいる、この選挙でB J Pが勝利すれば、南インドでの本格的なB J P政権の登場を意味するのみならず、次期連邦下院選挙への弾みを同党に与えることになる。

◇国際関係

シン首相訪中-尾を引く国境問題：シン首相が1月中旬に訪中した。訪問中に出された共同文書では、中国がインドの常任理事国入りに初めて支持を明確にした。また、両国は、2010年までに総貿易を600億ドルまで拡大することにも合意した。しかし、領土問題には進展がなく、訪中後にシン首相が東北部のアルナーチャル・プラデシュ州を訪問すると、野党と中国から批判を受けた。3月のチベットでの反中デモはインドにも飛び火した。

印米原子力協力協定の展開：インド政府は2007年11月から国際原子力機関との保障措置 (査察) 協定交渉に入り、2月末から3月初めの第5ラウンド協議で草案文書の原則合意に達した。しかし、左翼勢力の強硬な反対もあり、ブッシュ政権下で印米原子力協力が成立へ向かう可能性は次第に小さくなりつつある。

英仏首脳訪印：1月後半、英首相と仏大統領が、相次いでインドを初訪問した。いずれも、印米原子力協力とインドの国連安保理常任理事国入りに明確な支持を表明するなど、台頭するインドに熱いラブコールを送るかたちとなった。

パキスタン総選挙と新政権発足：延期されていたパキスタンの総選挙 (と州議会選挙) は、2月18日に実施され、大統領派が大きく後退し、反ムシャラフ勢力 (人民党とムスリム連盟 (N) など) が大きく勢力を伸張した。3月25日にはギラーニーが新首相に就任した。新政権はチョウドリー前最高裁長官の復職問題や対米関係を含めたテロ対策にどのような方向を示すか注目される。一方、今期の米政府も、「テロとの戦い」にパキスタンの協力を得ることを重点に置いたほか、同国の核管理-特に核兵器がテロリストに渡ることの懸念-への対応に迫られた。しかし、総選挙で反ムシャラフ勢力が勝利を収めると、その対パ要求を徐々に大幅にトーンダウンせざるを得なかった。

ネパール情勢：制憲議会選挙が4月10日に直接選挙と比例代表選挙で実施された。直接選挙では予想外に毛派などの左翼政党が伸張したこともあり、王制廃止が覆ることはなさそうである。最終的な選挙結果は4月23日に選挙管理委員会から発表された。

5. インドニュース

*ADB、地方の携帯電話普及に支援強化

最近の通信分野でインド市場の成長には目をみはるものがある。特に携帯電話業界の急速な成長の背景

にはインドで過半のシェアを握るノキア（フィンランド）はじめとする各メーカーによる低価格機種の販売競争の激化と主流とするプリペイド式サービスの通話料の引き下げがある。こうした旺盛な需要に対して通信インフラが追いつかず、地方の通信インフラの不足は深刻である。

2007年末のインドの回線電話と携帯電話の合計加入者は、前年末比44%増の2億7300万人に達した。政府は2010年末までに5億人を目標としている。

また、携帯電話の累計加入者はインド電気通信監理局（TRAI）によると2月末では2億5093万人で、過去月平均800件から900件の増加実績から推定すると3月末には、おそらく2億6000万人に迫ったと見られ、世界第2位のアメリカの2億5700万件（米業界団体CTIA）を超え第1位の中国に迫るいきおいと見られる。

アジア開発銀行（ADB）は、インドでの携帯電話カバー地域拡大プロジェクトに融資し、特に1万7100基の携帯通信中継基地を建設することにより地方の携帯電話カバー地域の拡大を支援する。

ADBはインドの最大通信インフラ企業であるGTLインフラストラクチャー社（GIL）に1億5000万ドルを融資する。GILは現在、第一段階として6600基の中継基地を建設中である。今回のADBの直接融資はGILの第二段階の事業向けで、2011年3月に完了を予定している。（日刊インドビジネスほか）

***今年の「日経アジア賞」の受賞者が決定する**

アジアの人々の生活を豊かにするうえで功績のあった人や法人を表彰する日経アジア賞の受賞者が一団体、2氏に決定した。表彰式は5月21日に東京で行なわれた。

科学技術部門ではインドのジャワハルラル・ネルー先端科学研究所名誉所長 C・N・R・ラオ氏が選ばれた。世界的な材料科学者として大容量磁気記録技術などの分野で1000本あまりの論文を発表するなど精力的に活躍している。当日の記念講演の要旨を紹介する。アジアの一員である日本で日経アジア賞を受賞したことは意義深いことである。21世紀はまさにアジアの時代といわれている。世界とアジアの未来はひとえに日本とアジア諸国の友好関係にかかっている。こうした観点から日本とインドの友好関係はこれからも極めて重要と考えている。私は長年、日本びいきで日本の科学界にも多くの友人がいる。数年前からは日本の科学的な活動に注目しており、日本の同僚とも緊密に連携しながら研究作業を行っ

てきており、ここ数年にわたり両国の科学的な協力を推進する日印合同科学評議会のインド側の委員長を努めてきた。私は半世紀にわたり分光学や分子構造、材料の研究を続けており、この分野の研究論文や書籍を多数、出版、発表している。現在、約 20 名からなる研究者を率いて、ともに研究を続けており、今後さらなる日印間の科学協力の成果が大なることを期待したい。

*紅茶価格の高騰の動き

穀物市場では世界的に価格上昇するなどの動きが見られるが、29 日付けのビジネスライフ紙によると、今後 3 ヶ月で紅茶の高級茶場市場で価格の高騰が予想される。世界的に紅茶需要の伸びが著しく、市場での茶葉供給量が逼迫してきている。主な理由としては北部インドやケニア、その他の紅茶生産国での 2008 年第一四半期の収穫量が少なかったことから、世界的に紅茶価格が上昇している。

また、二番摘みの茶葉に対する需要も依然として高いため、こちらの価格も上昇は避けられない。

インドの紅茶会社 DHUNSERI TEA and INDUSTRIES の会長 C. K. ダヌカ氏によると今後 5 年間で世界の紅茶の需要は年間 1 億 K ずつ増加することが見込まれるが、追加して生産することは、国際標準化機構 (ISO) による農薬残留量などの国際規格に合わせて紅茶の品質をあげることもあって、今後、世界市場での紅茶供給量は減少すると見られ、旺盛な需要に対応して行くことは難しいと予想される。

*人気の海外旅行先は東南アジア

28 日付けのビジネス・ライフ紙によると、400 万人と見込まれるインド人の海外旅行者を集客するために各国の旅行会社間の競争が激化している。オンライン旅行会社 TRAVELOCITY.Co.in によると、インド人の海外旅行先で人気があるところは、シンガポール、香港、バンコク、クアラルンプール、プーケットだという。インドから東南アジアまでの往復航空券は 19064 ルピーと安く、今年の夏の旅行先で人気があるのは東南アジアとか。隣国のスリランカは、インドと近いこともあって週末の短い期間を利用した文化遺産観光や買い物などを組み込んだパッケージ・ツアーが多い。

マレーシアの旅行会社では風光明媚なマレーシアの島々や高原を回る自然体験ツアーなどインド人家族をターゲットにしたツアーパッケージを企画しており、今夏、マレーシアを旅行するインド人は 18 万人と見込まれている。世界でもトップクラスの高級リゾート地モーリシャスでは、旅行会社は高級リゾート、モーリシャスを気軽に楽しめるツアーというキャンペーンを展開している。また、韓国もこれに負けじとインド人旅行者の誘致をしており、本格的にインドに参入する。韓国観光局によると欧州以外に旅行を考えているインド人をターゲットとして韓国のパッケージ・ツアーなどを企画しており、2008 年のインド人旅行者の目標は 7 万 5000 人だという。

2007 年の日印観光交流年を機会に日本とインド両国間の JAL、ANA など民間航空便の増発が実現した。今後、日本の旅行会社にも民間の観光交流が盛んになるようなツアー企画を期待したい。

テレビ朝日「世界の車窓から」インド編、デカン・オデッセイの旅立ちの放映が 5 月 29 日からシリーズで開始されている。この旅はマハラシュトラ州の風光明媚な町や世界遺産などの遺跡を 7 泊 8 日で巡る豪華列車の旅である。マホガニー調の内装はオリエント急行をモデルにしたといわれている。各国のお酒が楽しめるラウンジ、映画を楽しめる図書館、インターネットに接続するコンピュータール

ーム、さらに、乗客のためにジムやサウナ付きのマッサージルームも装備された走る豪華ホテルである。日本からの旅行者にも魅力あるインド旅行のツアー企画になると思われる。

6. 今のインド

日印協会理事長平林博氏（元インド大使）は3月に、千葉県我孫子市にある NPO 法人「ふれあい塾あびこ」開塾500回を記念する特別公開講座において「ついに走り出した巨象・インド」のテーマで講演した。講演の要旨を紹介する。

現在、インドの人口は11億2000万人で中国に次ぎ世界2位である。2015年には15億人に達すると推定される。急速な経済成長を続けており2006年には年率9.4パーセントを記録した。年収30万円から150万円の中間層は2億6000人をかぞえる。こうした中間層は、毎年、マレーシアの人口に等しい2600万人ずつ増加している。また、インド人は世界各国に2500万人が転出しており、主な活躍の分野はI・T産業、金融業界で、特にアメリカにおけるインド人の活躍には目覚ましいものがある。世界の鉄鋼王ミッタルはインド人、今年の世界の金持ちベストテンにはインド人が3、4人はいつている。

国土の総面積はヨーロッパ（EU）と同じ広さで日本の9倍ほど、329万平方キロ、世界第7位の広大な面積である。中国に次ぐ人口を有するインドの最大人種はインド・アーリア系が72パーセントで、多くの少数民族から構成される多民族国家である。公用語はヒンズー語であるが憲法で公認されている言葉は他に21言語ある。英語は準公用語であるが、一定のレベルのインド人に対し全国的に適用する。

インドは南アジアの地理的に重要な位置にある。最大の民主主義国家であり、この地域の安定した勢力としてアラビア半島からマラッカ海峡までインド洋をにらむ日本にとって重要な海の貿易のシーレーン生命線を握っている。2006年のGDPは8273億ドル（中国26800億ドル）、一人当たりで換算すると787ドル（中国2001ドル）である。アジアではGDPの順位は日本、中国に次いで3位である。経済成長率は2006年で9.6パーセント、過去10年の平均でみると6.6パーセントと高い成長を示している。特にIT産業の分野では急速な成長をみせており、ソフトウェアの輸出額は過去五年間で4倍になった。インド経済のなによりの強みは若い労働力にあるといわれている。全体の人口のほぼ過半を占める15歳から44歳までの人口は5.2億人に達し、20歳未満が労働力の43パーセントに及ぶ。日本が19パーセント、アメリカが28パーセント、中国が31パーセントと比較すると非常に若い労働者が活躍している。反面、多くの課題も抱えていることも事実である。人口の3割以上が1日1ドル程度の貧しい生活環境にあり、農業人口が7割を占めることから、これから外資をどんどん導入して雇用を促進し、製造業を育成することが望まれる。遅れているインフラ整備には今後5年間で5000億ドルにのぼる巨額な投資が必要である。

日印貿易は02年以降、順調に増加しており、2006年には75億ドル、対前年比14パーセント増であった。対インド経済協力は1958年に第一号借款が開始され、2006年度には電力、運輸、環

境や貧困対策、人材育成、人的交流などに1850億円が供与され、ODAの援助のなかでは最大である。

エネルギーと環境問題については世界的なエネルギー需要の急速な高まりに対応して持続可能な開発、環境にやさしい技術開発が求められている。日本の進んだ技術協力が必要である。

インドの外交は1990年から多極化し、全方位外交を志向し、米国、EU関係を大事にしながら、ルック・イースト（東を見よ）政策を強化しており、日中韓との関係を重要視している。インドは日露戦争で日本が勝利したことでネルー首相が「日本の勝利はインドを鼓舞した。アジアのすべての国に大きな影響を与えた。」と語ったことがインドの教科書にある父が語る世界史に記述されている。

ノーベル文学受賞者タゴール、インド国民軍の志士チャンドラ・ボース、極東裁判のハル判事との交流などに見られるように日本に対して歴史的に負の遺産の無い日本びいき、親日国である。しかし、人と文化交流（外務省調べ）をみるかぎり日印交流実績はこれからである。2005年、人の往来は16万人（中国155万人）、訪日観光客1.4万人（中国21万人）、在日留学生525人（中国7万3000人）である。平林氏の言うインドで成功するためのビジネスマン5ヶ条は次のとおり。

①トップダウンでない駄目、経営への積極的な関与、迅速な決断②インドに適した人事政策、長期滞在とインド人管理者の活用③インドの特性を理解、欧米的メンタリティーの理解とマネジメント術④大きな初期投資は当然と覚悟する、⑤パートナーの選び方、パートナー無しも選択肢のうちとしている。

日印貿易については2010年に200億ドルの達成が最重要課題としている。インドはインフラ整備が緊急課題でインドの幹線貨物鉄道輸送力強化計画やデリー・ムンバイ間産業大動脈建設構想などが現在進められている。最後に平林氏は「動き出した巨象に乗り遅れてはならない」と結んでいる。

7. イベント情報

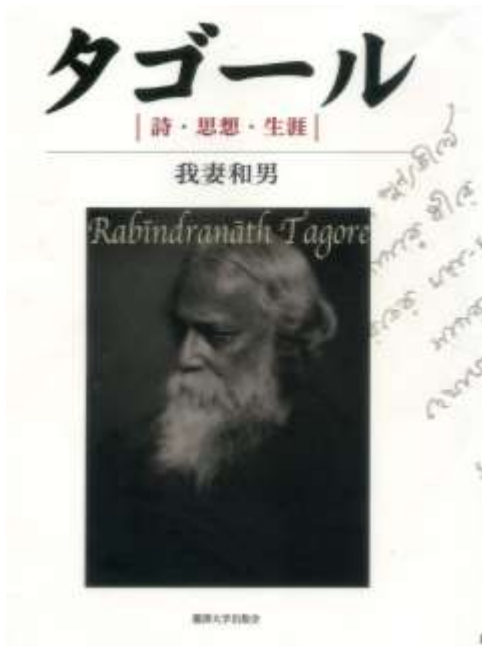
* インド古典舞踊バラタナティヤム横浜公演される

5月24日（土）、25日（日）の両日、横浜市のZAIM「ザイム」別館小ホールでナバグラハ（宇宙を構成する9つの惑星の神々）をテーマにインド古典舞踊バラタナティヤムが公演された。南インドのタミールナードウ州で生まれたバラタナティヤムの源は古く、インドの代表的な舞踊のひとつ。ヒンズー教寺院の巫女により神にささげられた踊り。インド国内だけでなく世界各国でインド文化を代表する舞踊として親しまれている。当日は雨天をものともせず、早くから熱心なファンが会場につめかけた。この舞踊は2007年日印交流年事業で日本とインドで公演された。今回、関係者の熱意により横浜公演が実現した。ナバグラハとはヒンズー教の神話の太陽神（スーリヤ）を中心とした惑星九つの神々が織りなす神話で南インドの古典音楽を基調に7種類のラーガ（メロディーの種類）と7種類のターラ（リズム）により踊りを表現している。また、これらの公演において、日本の伝統文化である獅子舞、お囃子などとインドの伝統文化である南インドの古典音楽・舞踊との融合（コラボレーション）を試みている。出演者はエミ・マユリさんとナーティア・マンジャリ・ジャパンの皆様によるもので、マユリさんの踊りは「はじける躍動感」と「眼と指による繊細な表現」で宇宙と渾然一体となり観客を魅了した。

* インドを語る集い 「様々なインド」協会講座 第18回 開催のお知らせ

『インドとわたし』をテーマに講師 菊池龍三氏（日印協会常務理事、事務局長就任予定）を迎えて6月27日（金）18:00から協会事務所にて開催。外務省時代通算16年に亘るインドのここだけの話・貴重な経験をお話し頂きます。講演の後は講師を囲んで交流会を予定しております。（詳しくは同封のチラシをご覧ください。）

8. 新刊書紹介



著者：我妻和男（筑波大学名誉教授）

発行：麗澤大学出版会

価格：3200円＋税

「タゴール～詩、思想、生涯」2006年、麗澤大学出版会刊
ロビンドロナト・タゴールはインドが生んだ現代のルネサンス人といえよう。タゴールは1913年、アジアではじめてのノーベル文学賞を受賞したベンガルの詩人である。その活動範囲は広く思想家、教育者、音楽家、画家、社会改革家でもあり、ほとんどのジャンルにわたる分野で縦横無尽の活躍をした偉人の一生を描いた大著である。

本書では現地を知ること無くても描くことの出来ないタゴールの多才で、そして多様な活動について誕生からの一生をタゴールの家族も含めて詳細に述べている。内容は第一にタゴールの法と思想、第二に今日の世界でも通用する真の普遍性、関連性、重要性があるか（この3つ合わせて総合的にプラシヨンキグ(ベンガル語)という)を述べている。

タゴールの思想の根底に流れるものは創造者のもとでは非創造者である自然と人間の関係は征服あるいは敵対するものでなく兄弟、共存の関係にある。政治的不殺生でなく宮沢賢治とも通ずる鉱物、動物、人間の共存にもとづく不殺生及び不戦の理念を持ちつづけること、政治や経済の分野においても倫理、道德感を欠くことは出来ない。宗教分野でも平和を脅かす争いをさげ、相互の認め合いを前提とした倫理観、道德観が必要である。タゴールのこのような東西文明の融合及び普遍的ヒューマニズムを尊重し、大義がある。インドの文化、言語、宗教及び人々の生活方法は多様で共存関係にある。誕生タゴールの多面性、多彩性、多様性はこうした背景に由来する。タゴールと日本の交流は1905年、日本伝統美術にルネサンスを巻き起こしたフェノロサの高弟岡倉天心の Kolkata 訪問に始まる。タゴールも1916年5月日本を訪れたのが最初でその後4回にわたり訪日し、横山大観とも交流を深めた。21世紀はインドの時代といわれ、活力と緊張に満ちたインドの未来は明るい。今後、日印の文化交流はますます盛んになることを期待したい。

「著者紹介」我妻和男（筑波大学名誉教授）。本文に紹介。主な著作・訳書は次に紹介する。

- ①『光の国・インド再発見』（編著：2005年、麗澤大学出版会刊）
- ②『タゴール』（人類の知的遺産61：1981年講談社刊）
- ③『タゴールと日本 日印文化交流100年』（ベンガル語：2004年、Kolkata 刊）
- ④『タゴールの絵について』（訳書：S・ボンディバディアイ著、1988年、第三文明社刊）

2. 首脳外交力

7月に北海道でG8の洞爺湖サミットが開催、環境問題などをテーマとして首脳外交が行われる。近世以来、外交は外務大臣や職業外交官が主役であった。しかし、第2次大戦以後では外交の主役は、民主的に選ばれた政府の首脳、大統領や首相が外交の最高責任を負うこととなった。いずれの国でも「首脳外交の時代」が到来したといわれる。国益を左右する外交の場でリーダーに求められる資質とは何かが問われている。「首相あなた自身がメツメッセージです」の副題が示すように、本書では歴代首相を含め実名を挙げて首脳外交を論じているが、今後の教訓とするために、外交機密に触れない範囲で首脳外交の舞台裏を職業外交官としての豊富な経験を生かして可能な限り具体的に書かれている異色の書である。



著者：平林 博（日印協会理事長）

1940年生まれ。東京大学法学部卒、外務省入省。ハーバード大学国際問題研究所フェロー、経済協力局長を経て内閣外政審議室長、インド大使、フランス大使、査察担当大使などを歴任。

現在、早稲田大学大学院客員教授、日本国際ホーラム参与等の要職にある。

著書に「フランスに学ぶ国家ブランド」（朝日選書）

発行：日本放送出版協会

価格：700円＋税

9. 掲示板

日印協会へのご意見

日印協会は、この1年間、新しい運営方針の下で活動をしてきましたが、まだまだ十分な実績を残すに至っておりません。今後日印協会がよりアクティブな活動が出来るように、新規会員の開拓、会員へのサービス、『月刊インド』／『インド季報』などの資料作成、イベント開催など、会員各位の貴重なご意見、アドバイスをお願いいたします。能力、マンパワーやツール不足で全て対応することは難しいかもしれませんが、極力会員のご意見、ご意向を今後反映していきたいと思っています。

表紙写真

杉並区に日印交流協会が活動しているが、5月に日印交流杉並議員連盟が発足した。発会式のスナップ写真である。関連記事は本文に掲載している。

編集後記

この一年間、日印協会事務局と『月刊インド』編集を担当してきました笹田は一身上の理由で、6月末を以って日印協会を辞します。非常に短い期間でしたが、大変お世話になりましたこと、衷心より感謝申し上げます。森会長始め、役員各位、平林理事長以下事務局と日印協会会員各位には、いつも温かくご支援とご指導を賜り、深謝すると共に、これからと思っておりました矢先で、内心誠に残念ではありますが、お許し願います。6月中旬の理事会にて正式に着任いたしますが後任の事務局長 菊池龍三氏と、編集を担当する局長と編集者が新たに加わり、さらに充実した日印協会の運営と『月刊インド』編集をしていただきますので、ご期待下さい。

『思い起こせば』と言うほどの長い間ではありませんが、日印協会にお世話になったこの1年間で、下名なりに感じたことを2点ほど上げるとすれば、まず、下名が日印協会にお世話になろうと決心した経緯として、昨年までは前任者の血の滲む努力にも拘らず会員数が少なく、協会の運営すら間々ならぬ状況を目の当たりし、下名でお手伝いすることがあれば差上げたいとの思いで勤務し出しました。平林新任理事長や役員各位の強烈なリーダーシップにて今や当時の企業会員数から倍増しております。また、

個人会員も圧倒的に伸びてまいりました。その意味においては会員募集に幾らかでもお手伝いできたかなと自負しております。しかし反省することも多く、日印協会として会員各位にどのようなサービスが提供できるのかとのジレンマが常にありました。会員になっていただくには、それと見合いの充実したサービス提供が義務であります。下名の能力不足ではありますが、会員の権利に対する応答が十分でなかったと思っております。インドでは『Indian Time』と称して実にゆったりと時間が流れるが、日々の実務に追われ、適切なアクションが出来なかつたと猛省している次第です。

下名は以前企業のニューデリー駐在員として6年余り現地に居りましたがビジネス上の観点でのインドしか見ておりませんでしたので、日印協会では企業駐在員の目から離れたインドを再発見しようと努めた積りでした。ささやかながら、『インドとは何か?』の再発見でした。物の本によれば、インドとは、悠久の、そして多様性の国であるとよく表現されます。駐在中は確かにそのように感じました。だが、今にして思えば、これは観念的印象であって本当に心に沁みこんだ理解ではなかつたと痛感しているのです。日印協会では、極力インド文化に触れる機会を作りました。音楽、舞踊、染織含めた絵画、彫刻などインド特有の古典文化が日本で数多く紹介されていますが、出来るだけ参加しました。そこで感じたことは、やはり日本文化とは根本的に違う(起源をインドに発するものもありますが)ことでした。具体的に説明するには余りにも少ない経験であり、逆に言えば、そこにインドの多様性を見出すのです。決して一言でインドを語り尽せないし、語ってもいけないとも思うのです。『インドでは何が起きてても不思議ではない。また、日本の常識はインドでは非常識』とインドを訪れる方に下名は常々申し上げた記憶がありますが、改めて、この1年間でインド文化とインド人に接して、実感をした次第である。この『月刊インド』6月号は、早速に新任の編集局長 山本さんと編集にお手伝いを頂く渡辺さんによって作成されました。未だ不慣れなところがありますが、今後とも宜しく願い申し上げ、下名の日印協会を辞する言葉とさせていただきます。会員各位のますますのご健勝と日印協会のご発展をお祈り申し上げます。

次回の会報『月刊インド』の発送日

08年7月号の発送は7月18日(金)の予定です。協会会員に呼びかけたいインドに関する各種お知らせを、チラシにして封入しませんか。

なお、08年8月号は休刊と致しますので、7月号にて改めてスケジュールをご連絡します。

～ 日印親善の輪を広げよう ～

法人会員・個人会員としてご入会ください

(財)日印協会は法人・個人の会費を主な財源として日印友好促進のため活動を続けております。

協会の主旨(日印相互理解を基礎に、両国の親善を増進する)に賛同していただける法人・個人であれば、規模の大小・職業・年齢・性別を問わずご入会を歓迎致します。

特典としては会報『月刊インド』の無料配布のほか各種催し物・会合のご案内、ご招待、旅行・ヨガクラス・語学講座等の優待、図書・テープ・ビデオの貸出し、日印交流事業への優先参加等があり、会員証(更新については希望者のみ)を発行致します。法人会員に対しては上記の他、政治・経済関係報告書の郵送及び日印経済懇話会(社会・経済の勉強会)への案内を致します。

☆年会費:個人	6,000 円/口	☆入会金:個人	2,000 円
学生	3,000 円/口	学生	1,000 円
一般法人会員	100,000 円/口	法人	5,000 円
維持法人会員	150,000 円/口		(一般、維持法人会員共に)



財団法人 日印協会 〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階

ホームページ: <http://www.japan-india.com/>

電話: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com

E-mail アドレスを変更しました。